

Title	Moshé LAZAR : AMOUR COURTOIS ET "FIN' AMORS" DANS LA LITTERATURE DU XIIe SIECLE, : Paris, Bibliothèque française et romane, Librairie Klincksieck, 1964, 300pp.
Sub Title	
Author	松原, 秀一 (Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.86- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Moshé LAZAR : AMOUR COURTOIS ET "FIN" AMORS"

DANS LA LITTÉRATURE DU XII^e SIECLE,

Paris, Bibliothèque française et romane, Librairie Klincksieck, 1964, 300 pp.

松原秀一

著者 Moshé Lazar 氏はイスラエルのヘブライ大学ロマン諸語文学教授であり、十二、十三世紀フランス文学についての多くの論文によって識⁽¹⁾られている。本書は一九五七年同氏がパリ大学に呈出し同大学より博士号を取得した学位論文 *Idéologie et Casuistique de l'amour courtois dans la littérature du XII^e siècle* を書き改めたものである。本書の第一章は既に一九五九年にイタリアの中世研究誌 *Studi mediolatini e volgari* (T. VI-VII, pp. 67-96) に *Les éléments constitutifs de la "Cortezia" dans la lyrique des Troubadours* の題の下に発表され南仏文学と北仏文学の恋愛観の区別の必要に注意を喚起した。本書の根幹をなす第二章 *Idéologie et Casuistique de la fin' amors* は一九六二年同じくイタリアの研究誌 *Filologia e letteratura* (T. VIII, pp. 253-273, 380-407) に発表され、南仏抒情詩人についての Appel, Jeanroy, Hoepfner 以来の定説に修正を齎らした。プロヴァンサル語による中世南仏詩人の「宮廷風恋愛」は中世ヨーロッパ文学に極めて重要な影響を与えたと考えられ、現代に至る西欧の女性観、恋愛観の形成にも深く関係するが、この「宮廷風恋愛」の实体は意外に捉え難いものであり、その理解にラザール氏は大きく寄与をなしたと云える。

ラザール氏の見解は同氏の論文の指導教授であったパリ大学の Jean Frappier 教授が一九五九年 Cahiers de Civilisation Médiévale (1^{re} Année, pp. 135-156) 誌に発表した明解な論文 *Vues sur les conceptions courtoises dans la littérature d'oc et d'oïl au XII^e siècle* によって広く紹介され、特にそれまで「プラトニック」なものと解されがちであったこの恋愛が十二世紀のプロヴァンサル詩人に於ては決してプラトニック乃至禁欲的な恋愛でなかった事を明らかにし、この恋愛を *fin amors* と呼んで明確に区別する必要を認識させた。この詩人達の恋愛観を捉えるには厳密に作品を検討する必要がある、漠然と「中世的」とか「宮廷風恋愛」等の語によって粗雑な議論をしてはならず、*Courtoisie, cortesia, amour courtois, fin amors* の各々を区別して論ずる必要のある事はラザール氏の一九五九年の論文も、フラビエ氏の論文も強調する所であるが本書の刊行によって、その論拠と論点が明確になったので、以下に紹介を試みたい。

「恋愛は十二世紀の発明だ」と云うセイニョボスの著名な言は警句に過ぎるとしても、十二世紀の西欧文学に、それまでにない新しい恋愛、女性観が出現したことは広く認められている。恋愛感情の文学的表現は歴史と共に旧く、旧約聖書の雅歌にギリシャ悲劇にローマ抒情詩人に、又、國を問わず時代を問わず見られる。しかし一方プラトンに於ては、不完全な存在が完全な存在を、即ち女性が男性を恋うのは正常としても、男性が女性を求めることは不健全とされ、多くのギリシャ悲劇では恋愛は狂気アプテの業であつて人間をカタストロフに導ぶものであつた。古典抒情詩に歌われる愛の対象は多くが「遊女」である。相思相愛の二人が苦難に耐え結ばれるのは、牧歌的ジャンルであつて、その文学を享受する貴族階級には起らぬものであつた。

この伝統下にある西欧文学で、女性に対する憧憬と共に女性を崇め、女性を愛する事を幸福の源泉とし、女性に仕える喜びを歌つたのがポワティエ伯ギヨーム九世であり中世俗語文学最初の抒情詩人と云われる。ギヨーム伯に於ては愛は男性の特権であり、生の欣喜であるが、彼によって近付き難い高貴な人妻に対する深い思慕、愛のためにまっただき服従を約する「宮廷風恋愛」への扉が開かれたのである。この恋愛では対象として既婚の貴夫人のみが求められ、乙女は対象とされない。恋愛は騎士の特権と考えられた。この「宮廷風恋愛」はギヨーム伯の孫アリエノール (Alienor, Eleonore) のルイ七世との結婚によって北仏に齊らされ、アリエノールの英国王

ヘンリー二世との再婚によって英国にも広められるが規範化されると共に変質もして行くことになる。

ギヨーム九世は一〇七一年に生れ一一二六年に歿した。彼の遺した十一篇の抒情詩は西欧俗語文学最古の現存作品であるにも拘らず詩法上の完成を示している事から西欧抒情詩の起源に数多くの仮説を齎らしている。又、一方、十二世紀に、突然出現したかに見えるこの「宮廷風恋愛」の誕生も、多くの学説を産み出した。その中でも戦後一般の耳目を集めたのはアラビヤ起源説とカタリ派異端起源説であろう。この他に古典ラテン詩と Clerici Vagantes の詩の影響を考える説、宗教詩起源説（聖母崇拜）の影響説等もあるが、日本には特に Denis de Rougemont によるカタリ派起源説が反響を呼んだようである。⁽²⁾

西欧に於て十二世紀は新しい局面を拓いた時期に当りハスキンス以来「十二世紀ルネサンス」と呼ばれる。表面的には封建制の最盛期であり乍ら、十一世紀の顕著な人口増加と貨幣流通の増大は経済面政治面からその体制を脅やかし都市の発達と商人の発生を準備していた。騎士の *adoubement* が一般に行われるようになるのは十二世紀中葉であるがこの頃同じく騎士の間に一般に規範として意識された「騎士道」は移り行く社会の中では旧体制に属する規範であった。十二世紀から盛んになる文学の中で騎士道は理想化されて行くと共に非現実的になって行く。「宮廷風恋愛」は斯うした理想の騎士、貴女の理念的恋愛となっているのである。

Lazar 氏の論文は問題を十二世紀に限定し、南仏詩人達「トリスタン物語」マリ・ド・フランスの短詩、ペルスヴァルを除いたクレティアン・ド・トロワの四作品を取上げ、その中に於ける「宮廷風恋愛」を分析する。この時代の限定は中世仏文学では十三世紀に入ると新しい展開を示すので重要である。十三世紀は学僧の増加、アリストテレス発見等から文学作品中のアレゴリーの使用が体系的となり象徴的表象の使用が目立ちはじめ、十四・十五世紀の龐大な散文小説、煩らわしいまでの論議と輻輳する筋による小説への途を拓くことになる。我々は中世文学を考える時、十四・五世紀の姿を投影して十三世紀文学を論ずる可きでないように十三世紀文学を十二世紀文学に投影し、その世紀に無かった物を見る事をしてはならない。「宮廷風恋愛」に関する議論でも、従来この区別が充分になされない憾みがあった。⁽³⁾ ラザール氏はこれに対し、「宮廷風恋愛」が南仏に現われ、北仏に伝播し普及していった十二世紀に問題を限り、その性格を捉えようとする。発生について著者は「騎士作法」⁽⁴⁾「精微な愛」⁽⁵⁾「南仏抒情詩」の各々の起源問題を多元的に論ずる可きである

と指摘するのみで深くは立入らぬが、十字軍による東方文化との接触、特にイスパニア回教圏との交流を重視するようである。

本書の中心をなす恋愛観については、十二世紀の所謂「宮廷風恋愛」と称されるものを三別し、初期南仏詩人の *fin' amors* クレテイアン・ド・トロワの結婚愛、トリスタンに代表されマリ・ド・フランスにも表われる情熱恋愛の三にわけ、特にこの中の *fin' amors* を初期南仏詩人達の作品の分析によって捉えようとする。*fin' amors* は十一世紀末に、十字軍の初めの熱情も醒め、期待も一つ一つ消えて行った南仏上層階級の間に現われた。それまでシリリア島、イスパニアを通して垣間見ていた東方の豊かな文化と地上的な生の喜びを笑見した南仏貴族達は、北仏より教会の規制の緩やかな事もあって、新しい宮廷生活を創り、そこには女性も参加するようになるのである。*fin' amors* は南仏詩人の独創とは云えぬまでも、後の北仏の「宮廷風恋愛」の様に *Ovidius* の影響も強くなく、学僧の中世ラテン詩、宗教文学から生れたものでもない。その教説は教会にとっては受入れ難い物であるが、反教会を旨とした物でもない。この恋愛観は北仏に移ると、物語風な文学で開拓され、在俗の学僧が作者になるため *Ovidius* の影響を強く受け、教会の規制の強い北仏ではこの恋愛の *adultère* 性が意識されるようになる。

この様に南仏と北仏では恋愛観が異なってくるので *Lazar* 氏は南仏抒情詩人の恋愛観を特に *fin' amors* と称んで広義の *Amour courtois* と區別する必要を強調する。*Amour courtois* と云う用語は十九世紀の碩学 *Gaston Paris* の用語であり、中世南仏詩人中では *Peire d'Avvergne* に *Cortez' amors* の一例があるのみで、一般には *verrai' amors*, *bon' amors' fin' amors* と云われていた上、術語としての明確さを欠くので狭義には *fin' amors* を用いる。同様に *courtoisie* の語も現代仏語の語義との混乱を避けるために南仏詩人の観念を示すには中世プロヴァンス語 *cortezia* を用いている。この語は領主の館、宮廷を表わす *cort*, *cour* (≠ *lat. cohors*) から出た *vllania* に対応する。

Cortezia の内容は、この語と深い関連を持つ *mesura*, *jovens*, *pretz e donar* 等と共に捉えにくいものであり、本書の第一章はその解明に当てられる。ラザール氏に依れば *Cortezia* が成立するには三つの態度が必要とされる。即ち *fin' amors* で愛する事、中庸を保つ事、爽気を持つ事の三である。このうち精緻の愛と爽気は北仏の *Courtoisie* と南仏の *Cortezia* を隔てる物であると云う。ラザ

ール氏はデノミ師の「Cortezia は雅びの恋をする人の理想であり、徳であり、Courtoisie は騎士の理想である」と云う定義を引用し、南仏の Cortezia を特徴づける。そこで fin' amors にも mesura, jovens, joi, cortezia pret e valor, donans の源泉であると云う。では fin' amors とは何か。ここでは明解な Frappier 教授の解説を借りよう。フラビエ氏によれば、fin' amors には次の六つの特徴がある。一、先ず、多くは人妻に対する愛であって夫婦間に存し得ない。二、愛される女性は貴族であり、多くは愛する騎士より上層の貴女である。三、盲目的な恋でも宿命的な恋でもなく、意志と理性によって選ばれた優れた女性に奉げられる。四、女性の名は秘密に保たれる。五この恋は容易に得られてはならず (cf. la Belle Dame sans merci) 多くの障害が介在しなければならぬ (cf. amor de lonh)。六、愛する者は定められた戒律、手順に順がわねばならぬ。⁽⁵⁾

この fin' amors の観念を得て初めて cortezia, mesura, jovens が捉えられる。即ち fins amanz の外的・社会的表現が cortezia であり、内的規範が mesura であり理性的側面であって jovens は内的感性である。Jovens は「若き」のみではなく王者の徳性とされる「気前の良き」「応暢き」を含むのである。この両意を含む単語はロマン語祖語には無く、アラビヤ語にあるからである。特にこの語がイスパニアと往復を重ねた Marcabru, Cercamon 等に多い事からアラビヤの影響をラザール氏は考えている。この Jovens は北仏の courtoisie では見られぬが南仏詩人の cortezia には欠く事の出来ぬものとラザール氏はテクストの上に論証する。この観念はアラビヤ神学に見られイブン・シナ Avicenne の靈魂論第五章にも見られると云い、ここでは「若き」「心の潤き」「気持の良き」を含む観念であるといはう。

この Jovens は Mesura によつて均衡を得る。武勳詩から騎士道小説に至る騎士の徳性として Mesure が重視されることは Courtoisie での Cortezia と同じく Mesura が重視される事を示す。Mesura は中世に重視された徳性で Roland の Marie de France の deux amants の Yonec も desmesure から死に至つてゐる。Cortezia, Mesura, Jovens が屬性であるのに対し Pretz e valor は結果として cortez である。Jovens な騎士が何事に於ても Mesura を保つて Pretz e valor は自らから得られ、恋に於ては Jois, joie に達する事が出来るのである。斯の様に Cortezia, Mesura, Jovens, pretz e valor, jois の諸観念は fin' amors のこの関係上に捉えられる。十二世

紀に南仏に現われた恋愛とはこのような構成の *fin' amors* なのであって、単なる女性崇拜ではない。⁽⁷⁾ この恋愛は人妻に向けられるので、キリスト教社会では *desmesure* ではないのか。第二章 *Idéologie et Casuistique de la fin' amors* の百頁は、この問題に当てる。ラザール氏は、先ず、南仏詩人を、*fin' amors* に対する態度によつて Jauré Rudel, Bernard de Ventadorn に代表される *idéalistes* と Marcabru に代表される *réalistes* に分けた Jeanroy 以来の区別は作品を分析して見ると根拠がないと論ずる。十二世紀南仏詩人の恋愛観は均一に *fin' amors* であり、*fin' amors* の不道德性を攻撃したと云う通説の Marcabru ですら作品ではっきり人妻との恋を歌い、しかもその渴望は肉欲的であり、プラトニックではなると云う。*fin' amors* はその Cortesia Jovens, Joi, Pretz e valor 等の観念から、修辭上の慣用的云い廻しが多く出来、Zunthor の云う *clavier* を持つ文字形式をつくるが、北仏では紋切型となるこの形式も南仏では、地中海世界的情熱に支えられた個性的表現の力を持つとラザール氏は指摘し、多くの作品の分析によつて、*fin' amors* の中心には官能的快楽への指向があることを明かした。恋人の目差も *joi* を与へ、恋の成就是全き歓喜を与える。(L'union des amants donne naissance à une joie suprême (p. 118)) この *joi* に与かるのは *fin' amanz* の特権であつて *vilain* はこれを知り得ない。従つてこの *joi* は肉体的快楽のみではないのである。この恋愛は恋する人を高貴にしその用語に、宗教的用語さえ用いられるが、教会の外で行なわれ、しかも反宗教ではないのである。ラザール氏が *immoral* ではなく *amoral* なのであるとするとこの恋愛は北仏に入ると変質せずにはいない。修辭を支えていた構造は南仏では情熱に満ちていたが、北仏では、構造のみが齊らされ、習得される技術になつて行く (*art d'aimer*)。南仏のこの恋愛は *trique* であつて *moral* の世界と無関係であつたとラザール氏は説明する。南仏社会におけるこの恋愛と道徳の問題は、どう意識されていたのか？ ラザール氏はそれをアヴィケナナ Ibn Sina の「二重の真理説 *Due Contrarie Veritates*」によつて説明している。北仏に入ると *fin' amors* と道徳の問題が意識されるようになり、ここにクレティアン・ド・トロワの *amour conjugal* が生れ、マリ・ド・フランスの姦通の美化が生れる。トリスタン物語の秘薬としての *amour-passion* の問題が特に北仏に於て開拓されたのも故なしとしない。⁽⁸⁾

以下の第三章、第四章は、*fin' amors* が北仏で如何に受入れられたかを、トマの「トリスタン物語」、マリ・ド・フランスの「短詩」

クレティアンの四作品アンドレ・シャプランの教説の検討によって追究して行く。fin' amors の構造が明らかになると、これらの作品の差異は鮮やかに見えて来る。マリの作品、又、「トリスタン」に於いて南仏 fin' amors にある l'octroi du "surplus" がはっきり存在する事、クレティアンの「クリジェス」の「反トリスタン性」の限界、マリ・ド・フランスが fin' amors を受容し乍らも、その規則の枠の厳しさに反対している指摘（一九三頁）等、ラザール氏の見解が作品の理解を深めた点が多いが北仏文学に於ける amour courtois に関しては既知の部分も多いと思われるので以下ラザール氏の見解に対し異論のあると思われる点を二、三しるしたい。

姦通と道徳の問題についてのラザール氏の見解は、確かにここに挙げられた北仏十二世紀の作品では成立するが、北仏の物語風文学を南仏抒情詩と比較している点は問題を残す。補説では一応北仏抒情詩人を取り上げているが lyrique であって moral でない点は、北仏抒情詩でも同様である。補説中で、北仏抒情詩中の、女性の形容が抽象的で stéréotypé であるとラザール氏は云うが（二六七頁）これも南仏抒情詩人についても同様に云える事であり、ロマンの女性描写と抒情詩とのジャンルの違いを考慮に入れる可きと思われる。また、クレティアンを取上げ乍ら、彼の二つの抒情詩を考慮しないのも不用意と云えよう。特に D'amors qui m'a tolu a mo⁽⁸⁾ に初まる詩 (Bartsch : *Chrestomathie*, pièce 32) は Bernard de Ventadour の絶唱 Quant vey la lauzeda mover の影響の下に書かれた、しかも fin' amors と微妙な隔りを見せている事は Fappier 氏も指摘している所である。⁽⁹⁾

ラザール氏はトリストアン物語の中でトリスタンとイゾーの間に置かれていた剣は、マルク王を歎むく為の作爲とする。この点とイゾーの姦通とフェニスの姦通は帰する点は同じとする見解、又、イゾーがマルク王との初夜をブランガンに代らせたのをトリスタンに対するイゾーの配慮として考える所では、テクストへの密着で余人の及ばぬ肉迫を示したラザール氏も近代的、合理主義的解釈に傾むきすぎているのではないかと云う懸念を感じさせる。ブランガンと替わったのは、乞食に粉したトリスタンに背負われて川を渡り偽証を脱れたトリックに類すると解するのが自然であろう。「トリスタン物語」で原トリスタンを論じないのはテクストの上に問題を扱う配慮であるが、beivre の期限の問題については論議が不足であってこの両点は惜しまれる。

以上、気付くままに問題点を取上げたが本書が、中世仏文学作品の理解に重要な問題を提起し、中世の作品をその時代に位置づけ正

当に解釈する有力な手掛りを与えることは確かである。特に南仏文学に於ける *fin* amors の特殊性を解明したことは、大きな寄与である。ラザール氏も云うように南仏がフランスとなったのは十三世紀であり、それまでは北仏と対等の国であったことを忘れ、北仏中心に考える傾向がある事は一考を要する。「南仏の中世人は北仏の人間よりもイスパニアに対し親近感を持っていた。Culturellement, économiquement, politiquement, le Midi se sentait plus d'affinités avec les habitants d'outre-Pyrénées qu'avec ceux du Nord. On a oublié, enfin, que le Midi n' a été annexé à la France qu' au XIII^e siècle」(11) という言明には、イスパニア十字軍の地理的障害としての「レネを考慮に入れ、我々の注意して良い事である。中世文学の失われていた鍵の一つを、作品の味読によって取戻した好論文である。

註 1 ラザール氏の著作としては本書の他、Bernard de Ventadour : Chansons d'amour, édition critique avec traduction, introduction, notes et glossaire. Paris Klincksieck, 1966 がある。下記の諸論文がある。

Classification des thèmes amoureux et des images poétiques dans l'oeuvre de Bernard de Ventadour (Filologia romanica, VI 1959 71-400).

La légende de L' "Arbre de Paradis" ou "Bois de la Croix", poème anglo-normand du XIII^e siècle, (Zeitsch. f. r. Phil, LXXXV, 1960, pp. 34-63; La plus ancienne adaptation castillane de la Bible (Sefarad, XXII, 1962, pp. 251-295; Lis Obros: chansons hebréo-provençales (Romanica et Occidentalia, Eudes H. Perit, Jerusalem 1963, pp. 290-345).

2 Denis de Rougemont: L'Amour et l'Occident 1956, 1959 Paris (邦訳ルビーン・キーン「愛について——エロスとアガペ」鈴木健郎・川村克己訳、岩波書店昭和三十四年)。

M. C. D'Arcy The Mind and Heart of Love (邦訳ターシー「愛のロロスとパトス 井筒俊彦 三辺文子訳 創文社、昭和三十三年)。

越知保夫「評論集好色と花」(筑摩書房、昭和三十八年)。
伊藤勝彦「愛の思想史」(紀伊国屋新書、昭和二十九年)。
女性像については「芸文研究」第十九号「文学・芸術に現われたる女性像」特撰中の諸論文。

3 De Rougemont の著書 Dupin-La courtoisie au Moyen Age, Picard 1931, (d' Argenes, 1963) (慶大三田図書館 B 950, D 1) は示唆に豊かである点から論拠が薄弱にならざる。Auerbach: Mimesis 特記 Chrétien de Troyes 解釈に於て十三世紀的象徴解釈に陥入つてゐる。筆者は著せしむる。

4 A. J. Denomy 博士 fin' amors の特異性を最初に注目した学者はこれである。問題を問うた記の論文を参照。

Fin' amors: the pure love of the troubadours, its anormality and possible source, Medieval Studies VII, 1945 pp. 139-207.

The Heresy of Courtly Love, Boston 1947.

Jovens: the notion of youth among the troubadours, its meaning and source, Medieval Studies XI, 1949, pp. 1-22.

"*Jois*" among the early troubadours: its meaning and possible source *Medieval Studies XIII* 1951, pp. 177-217.

Courty Love and Courtliness, Speculum XXVIII, 1953, pp. 44-63.

5 Jean Frappier: *Le Roman Breton* (fasc. I. *Les origines de la Légende arthurienne: Chretien de Troyes*, pp. 91-91) 図説のこの巻巻終りの「Jean Frappier: *Chretien de Troyes* (Hatier, Connaissance des Lettres), 22頁の46の註釋を参照する。

La Conception de l'amour courtois, ou *fin amor*, est une des créations les plus originales et les plus audacieuses du Moyen Age. Un désaccord, sinon une incompatibilité, s'accuse entre elle et le mariage. La dame dévouement aimée est le plus souvent d'un rang social supérieur à celui de l'amant, si bien que le service d'amour est en partie calqué sur l'hommage féodal et les devoirs du vassal envers son seigneur. Tout en se présentant comme un sentiment absolu, l'amour courtois n'est pas une passion aveugle ni fatale; il se fonde sur un choix, n'exclut pas toute volonté ni raison; la dame est élue pour sa beauté physique et morale, pour sa *valeur*. La loi du secret s'impose aussi aux "*fin amants*", et sans être nécessairement chaste—il s'en faut beaucoup d'après certains textes—, l'amour courtois est en principe un amour < de loin >, fortifié par l'absence et par les obstacles. Enfin il s'est constitué en doctrine, avec un code et étiquette qui réglementaient "l'avancement officiel des amants" (Stendhal) (1957 増補 pp. 14-15, 1968 増補 p. 11)

6 Denomy 博士の研究は疑い所がある。南仏詩人作品中 Jovens 三十九例の 4 の中に十七例は Marchu 博士の *Fin' amors* の研究の範囲に属する。南仏詩人作品 Jovens 三十九例の 4 の中に十七例は Marchu 博士の研究の範囲に属する。南仏詩人作品 Jovens 三十九例の 4 の中に十七例は Marchu 博士の研究の範囲に属する。南仏詩人作品 Jovens 三十九例の 4 の中に十七例は Marchu 博士の研究の範囲に属する。

7 Peter Dronke: *Medieval Latin and the Rise of European Love-Lyric* (Oxford 1965) 15 "I am convinced that that received opinion, this belief in a wholly new conception of love, is false. I am convinced that the question, why did this new feeling arise at such a place at such a time, in such a society, is a misleading one. For I should like to suggest that the feelings and conceptions of *amour courtois* are universally possible, possible in any time or place and on any level of society (p. 2) 21頁の 22 頁の巻巻の *amour courtois* fin' amors の巻巻を参照する。

8 南仏に於ける Tristan 物語のこの巻巻に記の論争を参照。

- Irénée Cluzel: *Les plus anciens troubadours et la légende amoureuse de Tristan et d'Iseult*, Mélanges Istevan Frank. pp. 157-170
 Maurice Delbouille: *Cercamon n' a pas connu Tristan*. Studi Monteverdi T. I. p. 198.
 Irénée Cluzel: *Cercamon a connu Tristan*. Romania 1959, pp. 275-282.
 Maurice Derboulle: *Non, Cercamon n' a pas connu Tristan*. Romania 1960, pp. 409-425.
 Irénée Cluzel: *Cercamon et Tristan*, Romania 1960, pp. 537-538.
 9 拙文「中世仏文学の恋愛観と女性像」(『中世研究』第十九号)に仏文学の descriptio figurae 詩中にリットン詩、ウロロンに表われ。 Cf. Faral: *Arts Poétiques*..... pp. 75 Sq.
 10 Jean Frappier: *Chretien de Troyes*, Hatier 1957, pp. 72-73, (Nouvelle édition augmentée 1968, pp. 69.)
 11 十三世紀のフランス王に帰したのはキタニアであり、聖エドワードによって一二五九年に再び英国王に与えられ、仏領に戻るのはいりっ・オキエントの代になってである。プロヴァンス地方は十五世紀末、ラングドックは十四世紀、オーヴェルニュは十七世紀にフランス王権に帰属した。